

大東市指定文化財

指定第1号 弥生式大型短頸壺型土器

野崎観音裏山造成中に出土し、弥生時代後期(3世紀)頃の製作と考えられます。口頸部にある竹管紋の装飾美は鮮やかで、巨大さと美しさは、府内随一との定評を受けており、大きな土器ながらロクロを使用しないで制作した技術は見事です。

壺の内部から複数の幼児の人骨が出土し、恐らくこの地域の有力者が、わが子を丁重に吊った壺と考えられます。

【口径 22.5cm 器高 63.6cm】



大東市教育委員会所蔵

指定第2号 石造九重層塔

基礎には「永仁二年(1294)四月八日」とあり、74字の金石文が刻まれている北河内最古の層塔です。風化が激しく全文は読めませんが、僧入蓮と秦氏が主君と両親の追善供養のために建立したことが刻まれています。【高さ 330cm】



野崎観音(裏山)

指定第3号 石造地蔵菩薩立像(延徳銘地蔵)

舟型に身丈 86cm 大で半肉彫され、「延徳二庚戌(1490)三月」と刻銘があります。尊像は右手に錫杖、左手に宝珠を持つ一般的な延命地蔵ですが、本市では年代のはっきりした地蔵尊として一番古く、当時の信仰を知るうえで貴重な石物です。

【高さ 128cm 幅 65cm】



龍間 龍光寺跡

指定第4号 石造地蔵菩薩立像(永禄銘地蔵)

舟形に身丈 60cm 大で半肉彫され、「永禄元年戊午(1558)八月吉日」に造られ、頼尊越後助という人が生前供養として、仏典を千部読誦したことが刻まれています。地元の武将と思われる頼尊越後助が戦乱の世に明日をも知れない身を思い、生前に供養した気持ちが伝わってきます。

【高さ 80cm 幅 60cm】



御領 西福寺南側

指定第5号 一石二段六地藏板碑

舟形に平均身丈 46cm 大の地藏尊が6体半肉彫されています。「永禄十年丁卯(1567)二月廿三日」の刻銘があり、六斎念仏の聴衆が自分たちの先祖供養のため建立したもので、北河内地域に現存する2基のうちの1基です。

【高さ 148cm 幅 86cm】



龍間 龍間バス停から街道沿い東方 100m

指定第6号 一石十三仏板碑

舟形に平均身丈 19cm 大の坐像が 13 体半肉彫され、「慶長十一年(1606)二月十一日」の銘文があります。十三仏とは初七日から 33 回忌までの 13 回の供養をしてくれる仏のことです。このような十三仏は生駒山系を中心に分布していますが、当石仏は本市唯一のものです。

【高さ 142cm 幅 74cm】



龍間 称迎寺境内

指定第7号 諸福天満宮本殿

記録には、寛永二十一年(1644)九月この地に天満宮を勧請したとあり、このときに本殿が造られたと思われれます。本殿は、拝殿の中にあり外からは見えませんが、江戸初期の檜皮葺の一間社流造りで、円柱、破風、木鼻などにみられる彫刻は、桃山建築風の様式を残しています。近年傷みが激しくなり、平成9年に修復されました。



諸福天満宮本殿(下は拝殿)

指定第8号 北新町遺跡出土戸口装置

5世紀中頃から後期と考えられる井戸の井筒に転用され出土した古墳時代の建物の戸口の部材です。

敷居を欠くだけで、中央の板扉、上部の鴨居、板扉の美技の壁板、そして左右の柱等の部材が揃っており、戸口構造を復元できる最古の実物資料として非常に貴重なものです。

【長さ 140cm 幅 40cm】

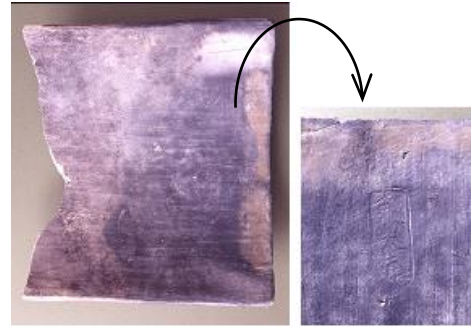


大東市所蔵

指定第9号 北新町遺跡出土東大寺刻印平瓦

平安時代末の戦乱により焼失した東大寺の再建に使用された町瓦で、鎌倉時代に備前国万富(現岡山市東区瀬戸万富)で製作されたものです。凹面に「東大寺」の刻印が押されています。

【長さ 30.9cm 幅 35.2cm 厚さ 2.6cm】



大東市所蔵

指定第10号 北新町遺跡出土翡翠製勾玉

膨らみを持たせた頭部、背部、体部に線刻があり、緒締形勾玉とも呼ばれています。弥生時代の勾玉ですが、縄文時代の特徴を受け継いでおり、一般的な形になる前のものです。翡翠は産出地が限られており、他地域との交流を示す貴重な資料です。

【長さ 3.5cm 最大幅 3.0cm 厚さ 1.4cm】



大東市所蔵

指定第11号 北新町遺跡出土花枝双鳥文鏡

中国鏡から日本独自の和鏡が製作され始める平安時代後期頃の鏡です。鏡背に植物と鳥類が対照的に描かれています。集落跡の東方で出土し、何らかの祭祀に使用されていたのではないかと考えられています。鏡の使用例を示す貴重な資料です。

【直径 8.9cm 厚さ 0.1~0.3cm 質量 63g】



大東市所蔵

指定第12号 堂山古墳群

生駒山地の補正の尾根先端に位置する古墳群です。1号墳は古墳時代中期の築造で、大量の鉄製武器や装飾品などが副葬され、この地域を統括した当時の有力首長の墓と考えられています。2~7号墳は古墳時代後期から終末期の築造で、摂津地域との関連をうかがわせる陶棺や、朝鮮半島にも類例があるT字型石室などが出土しています。



堂山古墳群史跡広場

指定第 13 号 北新町遺跡出土人面墨書土器

奈良時代の河川跡から出土した2点の土器です。人面墨書土器は、奈良時代に穢れ(けがれ)や罪を祓う(はらう)ための儀式に使用され、似顔絵や鬼などを描き、お祓いをしてから川に流したものといわれており、当時の人々の思想や文化を知る手がかりとなるものです。

【口径 16.4cm 高さ 14.9cm 厚さ 0.5~0.6cm】

【口径 16.2cm 高さ 11.5cm 厚さ 0.5cm】



大東市所蔵

指定第 14 号 龍間いしくの石工道具

龍間地域の石切場としての歴史は、秀吉の大坂城築城を契機とし、江戸時代の徳川大坂城再築城でも利用され、現在でも諸藩の刻印がある石や矢穴の残る石が付近に残されています。近代においては建築や土木工事の石材供給地として石工業が盛んになり、龍間地域では8軒が家業としていました。

この石工道具は、大正期から昭和 20 年代頃まで使用していた石工道具 42 点とその関連資料2点の計 44 点で、本市龍間地域の近代石工業の研究資料として、また、地域の歴史、生業の特徴を伝える民俗資料として貴重なものです。

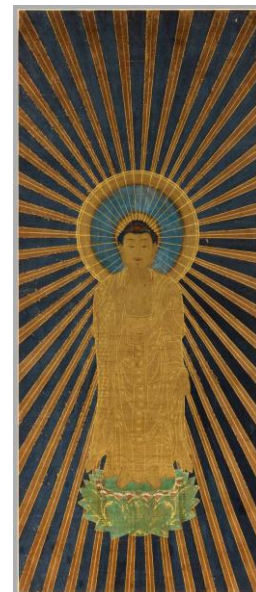


大東市所蔵

指定第15号 正覺寺 絹本着色 阿弥陀如来絵像

三箇・正覺寺に伝わる阿弥陀如来の絵像です。濃紺色の地に、48条の光明を放ち、蓮台上に両足をそろえて立つ阿弥陀如来の姿を描き、像身には金泥が塗られ、その上から金箔の截金で衣紋が描かれています。裏面の墨書から、永正14年(1517)に本願寺第9代実如が三箇庄へ授与したものとわかります。市内に現存する歴史資料のなかで、「三箇」の地名が確認できる最古のものです。

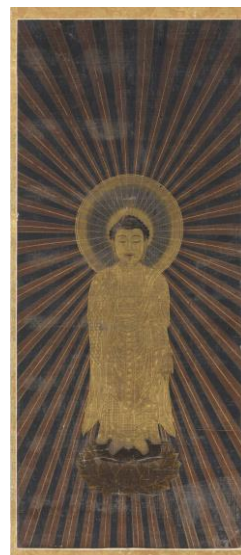
【寸法 90.6 cm × 37.3 cm】



指定第16号 専応寺 絹本着色 阿弥陀如来絵像

野崎・専応寺に伝わる阿弥陀如来の絵像です。裏面の墨書から、永正17年(1520)に本願寺第9代実如が専応寺に授与したものとわかります。裏書には、古代郷制の系譜を引く「山家郷南条」という古地名が見え、市内に現存する歴史資料のなかで、市域の地名が確認できる最古のものの一つとして貴重です。

【寸法 82.2 cm × 35.3 cm】



指定第17号 平野屋新田会所文書

18世紀初めに開発された深野池跡の新田のうち、深野南新田と河内屋南新田を管理運営した平野屋新田会所において継承されてきた古文書群です。新田開発までの経緯や年貢の推移、新田の管理、水利問題などに関する貴重な記録が含まれています。

【総数 677点】



大東市所蔵

指定第18号 慈眼寺 十一面観音立像

慈眼寺(野崎観音)の秘仏本尊です。制作時期は平安時代中期の10世紀後半頃と推定されます。制作当初は、聖観音立像でしたが、江戸時代前期に現在の十一面観音立像の姿に改変されました。享保6年(1721)に本像の特別開帳が行われるようになると、大坂市中など各地に野崎観音に対する信仰が広まりました。

【像高115.8 cm】



指定第19号 平野屋新田会所 千石蔵跡・道具蔵跡・
船着場跡・周濠跡

江戸時代中期(18世紀初め)の深野池の開発後、
深野南・河内屋南新田(現・平野屋・谷川・南新田周
辺)を維持管理した平野屋新田会所の千石蔵(米
蔵)・道具蔵・船着場・周濠の遺構が現地で保存され
ています。大東市の発展の礎を築いた深野池の新田
開発の歴史を物語る貴重な遺産といえます。

【面積 857.95 m²】



千石蔵跡

指定第20号 専応寺 聖徳太子立像

野崎・専応寺の太子堂に安置された聖徳太子像で
す。制作時期は室町時代と推定されます。太子16歳
の時、父の用明天皇の病氣平癒を祈念した姿をあ
らわした「孝養太子像」の形式をとっており、頭
部や顔の表現などから制作時期は室町時代と推定さ
れます。北河内に残る最古の聖徳太子の木像です。

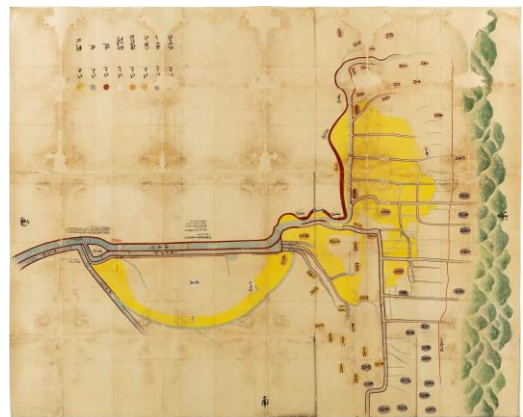
【像高 72.5 cm】



指定第21号 深野新田周辺川堤絵図(平野屋新田
会所旧蔵)

享保2年(1717)に徳庵堤修復をめぐる論争の際に
作成されたとされ、平野屋新田会所の所有者によって
代々継承されてきました。本絵図は山方32ヶ村から新
喜多新町(大阪市城東区)までの範囲を俯瞰してお
り、新田開発直後の深野新田周辺の様子が丁寧に描
かれた貴重な絵図です。

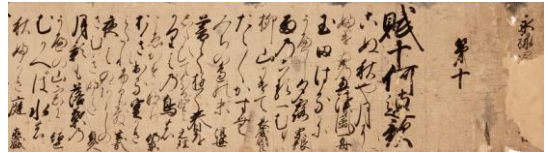
【寸法 縦190.6 cm×横236.5 cm】



指定第22号 飯盛千句 第十百韻 写本

永禄3年(1560)、飯盛城へ入城した三好長慶は和歌や古典文学にも明るく、飯盛城内では公家や連歌師等を招いた歌会もしばしば催されました。本史料は能書家の手による『飯盛千句』第十百韻の古写本で、文字の大小や太細の抑揚を強調した流麗な筆致など、連歌懐紙の一般的な書式が踏襲されています。さらに現存する『飯盛千句』諸本の中で最も古く、また、信頼性の高い学術的価値の高い連歌資料であることがうかがい知れます。

【寸法 縦17.5 cm×全長451.0 cm】



指定第23号 三好長慶書状

本史料は三好長慶が飯盛城へ入城する7ヶ月前に権少輔(公家の藤原清種カ)へ宛てた書状で、永禄3年(1560)の4月上旬に長慶が和泉や飯盛城に出兵していること、淡路島へ渡海していることなどが記されています。長慶が飯盛城へ入城し、飯盛城が天下人の城となっていく過程を知ることができる、貴重な一次史料といえます。

【寸法 縦15.2 cm×横41.4 cm】

